イギリス植民地（オーストラリア、ニュージーランド）に於ける公園緑地帯の形成と特質に関する研究

杉 尾 邦 江*

Research on the Origins and Formation of Park Belts with Colonial Development in Australia and Newzealand and Examining their Significance

Kunie SUGIO

摘要：オーストラリア、ニュージーランドにおける公園緑地帯（パークベルト及びタウンベルト）の発想の起源を文献等による検証によって明らかにすると共に、これらの公園緑地帯の意義、特質、機能及び形成過程と実態の一部を明らかにした。

また、タウンベルトの形成に失敗したクライストチャーチ市で計画されたグリーンベルトの発想は、ハワードの田園都市構想の原型である事を示した。

1. はじめに

1800年代の初頭から中期にかけて、イギリスの植民都市として建設されたオーストラリアのアデレード及びニュージーランドのウェリントン、クライストチャーチ、ダニーデン、インバカーゴ等の都市は、建設に当たって、公園緑地帯という新しい概念のグリーンベルトを創設したが、これらの公園緑地帯は、アデレードにあってはパークランド、ニュージーランド各都市ではタウンベルトと呼ばれている。この公園緑地帯は、アデレードでは1837年、ウェリントンでは1840年、ダニーデンでは1848年、クライストチャーチでは1850年にそれぞれ当初の建設がなされている。これらパークランド及びタウンベルトは、植民地建設時に公共の休息の場(Breathing place)、レクリエーションの場として、また、将来膨張するであろう都市と田園とを分ける帯として、あるいは、このベルト内は、公共の目的に使用する施設だけが建設されることなど、その機能は明確に決定づけられていた。その機能は公園緑地としての性格が強く、かつ永久に公共のために、リザーブされる事が確約されたものであった。従って、これらは営造物化され、現在まで多少の土地利用の変化と面積の侵略は認められるが、良好に当初の形を維持している事は驚くべき事である。F. J. オズボーンその他によれば、これらの公園緑地帯は現在ではわずかに残されているだけであるとされていた¹⁾。その実態は、存在意義に於いて重要であると認識されているにもかかわらず、一般に知られていない。このように既知見に誤りが指摘されるばかりでなく、未だこの公園緑地帯の創設過程、創始者及び発案者について明確にされていなかったのである。しかし、1982年春季造園学会に於いて、中村 一は、J. C. ラウンがガーディナー・マガジン

1829年12月号に発表した「一定原理に基づく、大都市及び郊外のための休息地の指針」をもって、アデレード、ニュージーランドの公園緑地帯のオリジナルであると指摘された²⁾。本論文は、これらの推論を更に検証し、この公園緑地帯の特質と重要性を後のグリーンベルトやハワードの田園都市構想等の都市計画手法に与えた影響、発想の形成過程及び実態を、今日的意義という観点より考察を行うものである。

2. 公園緑地帯起源の考察

2-1 公園緑地帯発想者の検証

公園緑地帯の発想者は、先に述べたようにラウンであり、その起源となったアイディアは Hints for Breathing Places for the Metropolis, and for Country Towns and Villeges on Fixed Principles(1829)の論文である。ロンドン改造計画への提案であるこの論文

1. Finchley Common; in the town of country.	17. Richmond; town; country.	34. Waltham; town.
2. Finchley; town.	18. Richmond; town.	35. Waltham; town.
3. Finchley; town.	19. Richmond; town.	36. Waltham; town.
4. Finchley; town.	20. Richmond; town.	37. Waltham; town.
5. Finchley; town.	21. Richmond; town.	38. Waltham; town.
6. Finchley; town.	22. Richmond; town.	39. Waltham; town.
7. Finchley; town.	23. Richmond; town.	40. Waltham; town.
8. Finchley; town.	24. Richmond; town.	41. Waltham; town.
9. Finchley; town.	25. Richmond; town.	42. Waltham; town.
10. Finchley; town.	26. Richmond; town.	43. Waltham; town.
11. Finchley; town.	27. Richmond; town.	44. Waltham; town.
12. Finchley; town.	28. Richmond; town.	45. Waltham; town.
13. Finchley; town.	29. Richmond; town.	46. Waltham; town.
14. Finchley; town.	30. Richmond; town.	47. Waltham; town.
15. Finchley; town.	31. Richmond; town.	48. Waltham; town.
16. Finchley; town.	32. Richmond; town.	49. Waltham; town.
17. Finchley; town.	33. Richmond; town.	50. Waltham; town.

- ① ラウンのロンドン計画に対するプロポーザル「休息地に対する指針」に基づく緑地帯のダイアグラム

* (株)ブレイク研究所 武蔵工業大学建築学科

の原理、内容の重要性は、中村 一の論文に詳述されているので、ここでは省略する³⁾。

このような重要な論文が、後世の都市計画史や都市計画に関する論文に現れず、見過ごされてしまった事は大きな疑問である。このことについては、Melanie Louise Simo は、*Loudon and the Landscape* で、こう指摘している。「残念な事に、ラウドンはあまりにも多くの出版、発明、仕事を精力的にやり過ぎた。彼自身の明確なる見解がそれでばやけてしまったのではないか。それから彼の着想は、常に時代の先を行き過ぎ、時代が答えるには早すぎたのである⁴⁾」。

死の直前2年前には、メトロポリタン改造委員会のメンバーになっていたにもかかわらず、ラウドンのロンドン計画のプロポーザルは終生、ロンドンでは実現されなかったのである。このラウドンの発想した多目的グリーンベルトの原理が、アデレードとニュージーランドのパークランド及びタウンベルトに適用されたと確信されるのは、次の点が類似し、共通していると指摘されるからである。

アデレード及びニュージーランドのウェリントン、ダニーデン、クライストチャーチは、エドワード・ギボン・ウエイクフィールドが実質的に組織した民間移民会社サウス・オーストラリア・カンパニー及びニュージーランド・カンパニーによって建設されたのである。ウエイクフィールド及びニュージーランド・カンパニーについては後述するが、植民都市の建設は、これまでにない全く新しいシステムティックな移民計画に基づいて行われた。新しいユートピアの建設として、タウンプランは強いウエイクフィールド個人の指導の下に行われた事は確実であり、彼は次の指示を行っている⁵⁾。

- (1) 全て公共目的のために十分な土地をリザーブする事。
- (2) 公共目的としては、墓地、市場、下水処理場、港、公共建築用地、植物園、公園、延長可能なブルーバードの建設。
- (3) リザーブ用地は町の外側に設置される事。
- (4) これらは広い帯状の土地で、周りの田園地帯と分けられる事。
- (5) これらの用地は、公共用地として永久に保存するものであり、ここには今後一切の建物を建てる事はできない事。
- (6) この事は、移民会社の利益を追及するのではなく、移住者の将来のためである。
- (7) 将来の環境保全、市民のレクリエーションのためにリザーブされるものである事。

一方、ラウドンは次のように述べている⁶⁾。

(ア) ベルトは、自然の形の方が美しい。また、自然の地形等を利用する。例えば、川、海等に面しているところはベルトの必要はない事。

(イ) ベルトの自然的景観を積極的に作り出して行く事。

更に、ラウドンは別に彼のガーディナー・マガジンで次のことを提唱している。

(a) 美観を創出するためには、墓地と植物園を隣接させる事が望ましい事⁶⁾⁻¹⁾。

(b) ワーキングクラスの人達の健康とレクリエーションの場の提供、特に、歩行空間（パブリック・ウォーク）の確保を強調している事⁶⁾⁻²⁾。

アデレード及びニュージーランドの都市は、上記のような条件を具備して建設された。アデレードは、平坦地と緩やかな傾斜地から成り、町の真中に川が流れ、また、ウェリントン、ダニーデンは海（即ち、湾）に面している。従って、馬蹄型をしたタウンベルトとなっている。

ベルトは公園の帯とし、アデレードにあっては地下水位の関係で、植物園と墓地の位置は変更されたが、ウェリントン、ダニーデンは植物園と墓地は隣接して計画された。ベルトの中には積極的な自然の美しい景観を作る事としたラウドンの指針にあるように、植物園と墓地によって、美しい景観を先駆的に作り出していた。

2-2 公園緑地帯創設者

公園緑地帯創設について、オズボーンを初め様に、誰が発案者で、誰が創設者であるかが解明されにくく、謎とされた事には次のような理由がある。創設者であるウエイクフィールドは、ある罪によりニューゲイトに投獄された事がある。この不名誉な理由により、生涯、公の立場に立てず、著作、論文全て偽名、もしくは友人の名前を使用した。従って、彼の著書、論文の判定を後世難しくした事。また、オーストラリア、ニュージーランドの植民地を実質的に建設したサウス・オーストラリア・カンパニー及びニュージーランド・カンパニーの実質的創設者であったウエイクフィールドは、この会社にあっても名前は公表されなかった。表面に出て活躍したのは彼の2人の弟であり、息子であった。他の理由は、最初に作られたアデレードのパークランドの建設実行者ウィリアム・ライトが建設途中で病死した事と、彼の宿舎の火事で多くの資料、記録が焼失してしまったという不幸が重なった事によると考える。しかし、ラウドンの発想によりウエイクフィールドが創設し、ライトが実行したことは、先のような指示が建設にあたってサウス・オーストラリア・カンパニー及びニュージーランド・カンパニーよりあった事が記録にあることから明確である⁵⁾⁻⁷⁾。

2-3 ラウドンの計画に類似した事例

ラウドンの指針に触れた研究と知見としては、今のところ、中村 一及びM. L. サイモによる、*Loudon and the Landscape* があげられる。サイモは唯一、ラウドンのロンドン計画に対する指針としての多目的グリーンベルトについて述べているが、この計画案は実現されなかったとしている⁴⁾。ラウドンの研究者としてのサイ

ものでさえ、この指針がラウドンが発表した直後10年も経たないうちに、アデレードでこの基本的な理念が実現したことを知らないのである。しかし、彼女はオルムステッドがラウドンの指針に興味を持ったとしているので、オルムステッドの確立したアメリカに於けるパークシステムのアイディアは、ラウドンに触発されている可能性が高いと述べている⁹⁾。

ラウドンの指針及び公園緑地帯の概念に類似した計画の提案で注目されるものを抽出し、それらのパークランド及びタウンベルト発想のオリジナル性について検証を行った結果は次のとおりである。

(1) J. S. バックinghamのVictoria構想は、1849年の発表であり、当然アデレードやウェリントン、ダニエデンの建設よりも後の発表であり、これがオリジナルである事は不可能である⁹⁾。

(2) ロバート・ベンバートンによるハッピーコロニーも明らかに植民地建設後の発表であり、またこれもオリジナルなアイディアに影響したとはいえない⁹⁾。

(3) T. J. マスレンはThe Friend of Australiaで、次のように提案している。

「理想的なオーストラリアの都市は、完全にパークランドで囲まれており、町の入口は全て公園を通るべきである。パークベルトは直径1マイルか2マイルで完全に全ての町をとり囲むべきである。また、川あるいは湖によって浸食を受ける土地は避けねばならない。パークランドの環境は、人々に健康とレクリエーション、喜びを与えるものであると同時に、景観的にも美しく、更に外部から見た時、町の景観をすばらしいものとするであろう。」¹⁰⁾

この文については、ジョージ・フィンケルの「ウィリアム・ライト」の中で、「このアイディアをライトは用いたに違はなく、そのことは、ある植民地建設の指導者によって指示されたものである」としている¹¹⁾。

マスレンのアイディアはラウドンのアイディアに酷似

② アデレードのオリジナルプラン

(ウィリアム・ライトによる 1837年)

しており、かつ、具体的である。これは1830年に発表されたが、ラウドンの論文は1829年に発表されているので、マスレンはこのラウドンの論文に大きな影響を受けていた事は間違いない。ここでマスレンは、他の名をA. F. ガーディナーといい、彼自身はオーストラリアに行った事はなく、また、若い時に東インド会社に関係した事を自ら記している。このマスレンの提案が、アデレードのパークランドの建設に最も直接的に影響した事は確かである。筆者は、このマスレンは、実はウエイクフィールドその人であると確信するのである。先に述べたように、ウエイクフィールドは自分の著書には全て偽名を用いるか、あるいは友人の名前で発表しているので、マスレンという名前もウエイクフィールドの偽名であると思われる。なお、ウエイクフィールド自身、一度もオーストラリアの土を踏まず、また、東インド会社に関係していた事も一致する。また、1830年の発表というのは、ラウドンの指針発表の翌年であり、ウエイクフィールドの新しいシステムティック植民地計画が発表されたのも、ラウドンの指針発表と同じ年である。ラウドンの指針発表と同じガーディナー・マガジン1829年の12月号に、ウエイクフィールドの書いたと思われるA Letter From Sydneyという投稿文が掲載されているが、彼の移民計画を著した論文は同じ題名で、A Letter From Sydneyであった。ウエイクフィールドは偽名によって、ラウドンの論文を参考に、新しく建設されるアデレードのパークランドをイメージしたものと思われる。

2-4 植民地形成に於けるウエイクフィールドとラウドンの役割

ウエイクフィールドが、新しい植民地計画の構想を練ったのは、ニューゲイト刑務所の中に於いてである。最初に、The Punishment of Death in The Metropliceというパンフレットを書いたが、これは短いもので、

③ アデレードのパークランド (航空写真)

1831年に発刊された。英国の様々な改善すべき点を指摘し、植民地政策の革命的ヒントがここに見られる。次に、上記のとおり1829年に A Letter From Sydney が偽名で発刊された。これは彼の Systematic Colonization の理論と実行の指針を体系化したものである¹²⁾。その基本は、

- ① 博愛主義に基づいた自由な植民地
- ② 労働者を初めとする移民者の環境の改善
- ③ 農業の振興
- ④ 先住民との共存
- ⑤ 科学的、システムティックな植民地建設

である。

当時、イギリスでは余剰人口の処理に困っていた。同時に、都市環境の改善、良好な住環境、空間の確保が必須であった。ラウドンが中心となり、パブリックパークの運動が頂点に達した時に、新しい移民計画がなされた。ラウドンが提唱した指針について、ラウドン自身が述べたように、この計画はロンドンに適用される事は勿論、オーストラリアや中小の都市に適用されるべきであるとしている⁶⁾。当然、ラウドンは、ウエイクフィールドにこの案の採用を勧めたに違いない。

ラウドンとウエイクフィールドが考えた新しい都市は、良好な環境の創造、新しいユートピア、世界で最も美しく平和な森と湖、緑でイメージされるガーデンシティである。これらを具体的に、はっきりと具現化させたのはラウドンの指針である。彼のガーディナー・マガジンは、遠い植民地、オーストラリアを含み、世界中に読者を有し、また、その内容は、政治、文化、技術、科学、経済、芸術にまで及んだ総合雑誌である。中には、ウエイクフィールドとの関連を示す記事も見られる。

また、オーストラリアに休息地 (Park) のコンセプトを導入する要望、オーストラリアがいかに理想的な植民地になる可能性があること、シドニーに公園やプロムナードを作るのでハイド・パークのような公園のスケッチを送ってくれ等の投書も多い。ラウドンのガーディナー・マガジンは、一種の啓蒙的総合雑誌であったとも言え、

④ ウェリントンのタウンベルト (航空写真)

その影響力は多大であったと考えられる。

3. アデレード及びニュージーランドの公園緑地帯の特質

3-1 成立の背景

オーストラリアのアデレードが、最初のウエイクフィールド発案の植民地として建設されるにあたり、その責任者としてライトが選出された。彼は、軍人、船乗り、画家、音楽家、技術者と様々な顔を持つ、ロマンティストであった。当時、都市計画家等という職業はなく、サーベイヤー (測量士) が都市計画を行っていた。しかし、このような建設には、彼のように優秀なゼネラリストを必要としたのであったが、建設半ばで亡くなり、資料の多くが焼失してしまったのである。

ライトは、アデレードに行く時に、サウス・オーストラリア・カンパニーのウエイクフィールドから2-1にあげた指示を受けている。

この指示を受けて、ライトはこれからのモデルとなる新しい植民都市の計画を立てたのである。ウエイクフィールドが強調したのは、ヨーロッパやアメリカ、カナダの植民地より更に美しい、自然の風景から成る公園の帯に囲まれた町をイメージしたのである。パークランドのイメージも町のイメージも、全てがライトの構想によって実現したのであった。

3-2 アデレード及びニュージーランドの緑地帯の価値とその意義

アデレード、ニュージーランドに始まったといえる、近代的都市の緑地帯は、その目的を、公園的性格を持った公園緑地帯で都市を囲み、都市と田園を分離し、都市の健全性、アメニティ、美観を保全し、公園緑地帯をレクリエーションや休息の場として永久にリザーヴした。

アデレード及びニュージーランドのウェリントン及びダニーデン、インバカーゴの各都市は、完全に都市の周りを公園緑地帯で囲み、公共の目的のために緑地帯を営造物化した。これは、1854年の公共用地のリザーヴ地に

⑤ ダニーデンのタウンベルト (航空写真)

関する法律によって管理され、引き続き“Reserve Act 1977”によって、それぞれの市所有地となり、その管理は市の公園・レクリエーション局の所管となった。タウンベルトの公園緑地帯は、この1977年のリザーヴ法によって、全てのニュージーランドの公共の目的のためにリザーヴされる事が保証され、次のようにその機能を明確化した。

- (1) 景観の保全
- (2) 歴史・文化遺産の保全
- (3) レクリエーションの提供
- (4) 科学的場の提供
- (5) 自然環境、エコシステムの維持

とりわけ、ニュージーランド特有の自然や生態、景観の維持に力を注いでいる。同時に現在では、詳細な管理計画によって管理されている^{15), 16)}。

アデレードのパークランド、ニュージーランドのタウンベルトの特質と意義については、次のとおりまとめる事ができる。

- (ア) 緑地帯は、公園緑地的機能を持つ等、公園、各種レクリエーション施設、スポーツグラウンド、ゴルフ場、歩道のネットワーク、ドライヴウェイ、ピクニック園地、展望園地等が整備されている。
- (イ) 土地は全て営造物化し、永久にリザーヴされる。
- (ウ) 公共用以外の土地利用はしない。
- (エ) 後世のパークシステム、グリーンベルトの各思想に大きな影響を与えた。
- (オ) 公園緑地帯は、ベルト状で都市を囲む。但し、一方が海、川などに接している場合は、海、川がベルトの機能を持つものとする。
- (カ) 緑地帯には、必ず植物園、墓地が隣接される。
最後に特質すべき事は次のとおりである。
- (a) パブリックパークの思想・概念が、初めてこの公園緑地帯に適用され、実現化した。
- (b) ウェリントンに於いては、現在外側にアウトータウンベルトの計画が進行中である。アウトータウンベルト計画地内の農地を徐々に購入し、しかも農地はリースバックして、一種のファームパーク的な性格を持って、公園化を行っている。ラウドンのオリジナルなプランにウェリントンのタウンベルトは近づきつつある。

4. クライストチャーチのオリジナル・タウンプランとハワードの田園都市構想に与えた影響

ハワードの田園都市構想は、クライストチャーチのオリジナル・タウンプランと非常に酷似している。

まず1,000エーカーをキャピタル・シティとして、スクエア、基幹道路、公共建築、公園、その他の公共の便益等に供し、これは1/4エーカーずつに区画される。更に、鉄道、道路で結ばれる衛星的のタウンとして500エー

カーのタウンを建設し、その周りにタウンの郊外地区として、やはり500エーカーの土地で囲む。但し、衛星的のタウンはキャピタルタウンより大きくてはいけないとされている¹⁵⁾。また、それらの町の間はルーラル[Rural: タウンプランニングに於ける用途地域の指定をRural Area, 即ち主として農業用地として利用される地域]¹⁶⁾としてゾーニングされる。従って、リザーヴとして営造物化されるタウンベルトはなく、各タウンの周りは地域性のグリーンベルトとする。

ハワードの田園都市構想とこの考え方は同じで、ガーデンシティの原単位はクライストチャーチのキャピタルシティに等しく、ハワードのベルト状のグラントアベニューのグリーンベルトが、クライストチャーチの郊外ゾーンに当たることになる。以上の類似点からも、地域制グリーンベルトのオリジナルはクライストチャーチにみることができると言える。

5. まとめ

本論は、イギリス植民地(オーストラリア、ニュージーランド)に於ける公園緑地帯の形成と特質に関する研究の一部を報告したものである。これまで、オーストラリア、ニュージーランドの公園緑地帯の発想の起源、発生の背景、また、これらの重要性や実態について明らかにされていなかった。特に本論では、公園緑地帯の発想の起源を明らかにすると共に、後のハワードの田園都市構想及び地域制グリーンベルトのオリジナルともなっている事を示した。この公園緑地帯形成の時期は、パブリックパーク、グリーンベルト、田園都市構想の形成以前に行われたものであり、極めて重要な意義がある。この公園緑地帯は、我が国に於ける最近の大規模住宅地開発に大いに適用されることが望まれると共に、我が国のパブリックパークについても、その原点を改めて認識する必要を示唆している。

⑥ クライストチャーチ
オリジナルタウンプランニングのダイアグラム

⑦ ハワードのガーデンシティ構想のダイアグラム

引用文献及び参考文献（◆印：参考文献）

- 1) Osborn, F.J. : Green Belt Cities/The British Contribution, London, 1946 P. 172, 178 PP. 140-41
- 2) 中村 一 : ラウドンの緑地帯構想 日本造園学会春季大会研究論文要旨集 PP. 19~20 I-12, 1982
- 3) 中村 一 : 手法としての緑地帯とその展開（都市に於ける緑の保全）公園緑地V44-No. 4, PP. 10~14 1983. 10
- 4) Simo, Melanie Louise : Loudon and the Landscape/Yale University Press. PP. 227~246 1988
- 5) New Zealand Company Records (N.Z.C.) Ward to Smith, /August 1839 102/1-2
- 6) Loudon, J.C. : Gardener's Magazine : (158, 307, 400, 503) 1828, (686~690) 1829, (481, 79) 1831, (649, 653) 1835, (327) 1836, (145, 316, 455) 1837
- 6)-1 (455)1839
- 6)-2 (96, 529)1832, (650~651)1835
- 7) Elder, David : William Light's Brief Journal And Australian Diaries P. 27, P. 42 1984

- Wakefield Press Adelaide
- 8) Burke, Gerald : Towns in the making/Edward Arnold Ltd. P. 93, PP. 124~129 1971
 - 9) Pemberton, Robert : The Happy Colony P. 111/London 1854
 - 10) Maslen, T.G. : The Friend of Australlia P. 263 1830/London
 - 11) Finkel, George : William Light/Angus and Robertson, P. 129 1972
 - 12) M.F. Llord Prichard : The Collected Works of Edward Gibbon Wakefield PP. 33~191 1968 Collins/London
 - 13) Wellington City Council : Inner Townbelt Zone Management Plan 1981-3-18
 - 14) Dunedin City Council : Management Plan Townbelt Resource Statement 1982
 - 15) Canterbury Association : Pamphlets 1848-1852/Christchurch, 3-4, 1950
 - 16) Christchurch City Council : The City Christchurch District Planning Scheme/P. 8 1986
 - ◆O'connor, Irma : Edward Gibbon Wakefield /Seewyn Blount Ltd., 1928
 - ◆Quirn, Joan Patricia : The origin and Development of the Wellington townbelt/Victoria University, 1966
- 図版の出典
- ①Melanie Louise Simo/Loudon and the Landscape P228
 - ②The Adelaide City Council/P. 3 May 1986 : A Submission Prepared for the Adelaide (Regional Tourist Association)
 - ③South Australlia Mapland Department of Land
 - ④ 杉尾邦江 撮影 ⑥ 杉尾邦江 作成
 - ⑤Allied Press Print No. A-6 : Dunedin From the North
 - ⑦Gerald Burke : Town in the Making P. 149 (前掲)

Summary : The aim and intension of my research are summed up in the follwing there points.

- (1) To discover and research the original idea of Park Belts in Adelaide and New Zealand and town planning point of view.
- (2) To find out the origin, development, detailed facts and ideas of the Park Belts.
- (3) To understand evaluate the influence, the Town Belt idea gave to Haward's idea of a garden city and modern green belt planning.